



12th コンサート第3部曲と合発曲をレッスン

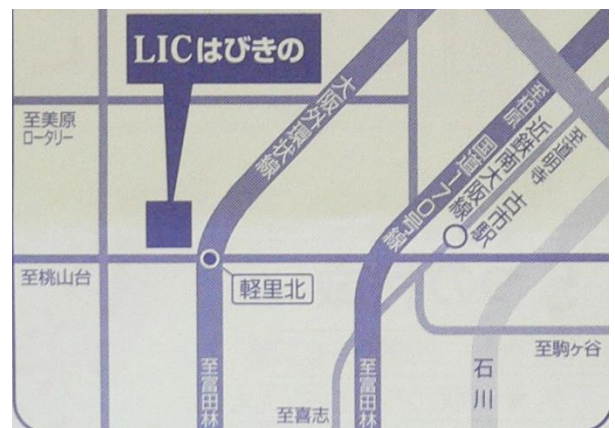
8月31日

□ 8月31日(金) 18:00~20:30 定例レッスンは、佃さんの体操、千秋さんのヴォイストレーニングに始まり、8月27日(月)のレッスンに引き続き、12th コンサートの第三部の曲および合唱発表会曲をレッスンしました。本並先生の指揮で、「SIYAHAMBA」と「君死にたまふことなかれ」を、休憩・連絡事項の報告等のあと、「橋を作ったのはこの俺だ」と、再度「君死にたまふことなかれ」を本番並みに全曲通して、時間を計ってレッスンしました。ピアノは森二三さん、参加者は全32名でした。



大阪のうたごえ合唱発表コンクールと「LICはびきの」まで

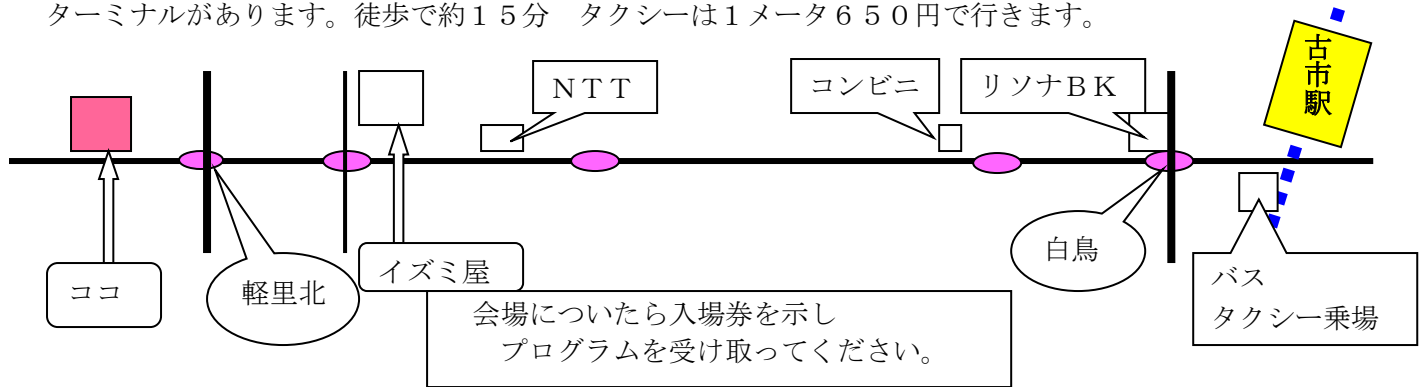
2018年9月9日(日)



近鉄 阿倍野橋駅より

◆ホームは③④で吉野方面行き電車に乗車・古市駅で下車 (急行で16分準急で20分かかります)

- ◆古市駅の改札への階段は進行方向の一番前です。改札(出口)は2階で一カ所しかありません。
- ◆改札を出たら右へ進み、突き当りの左の階段を降りる。道路に出たら右へ進む。すぐ左にバスとタクシーのターミナルがあります。徒歩で約15分 タクシーは1メータ650円で行きます。



男声合唱団「昂」

- 集合時間 16時30分
(リハ16時50分)
- 集合場所 3F音楽室
- 赤シャツ、九条バッジ、黒ズボン、黒靴
- 「君死にたまふことなかれ」
- 指揮：本並美德 ピアノ：西應 静

出場団体	リハーサル	出演順	本番
関西紫金草	15:00 ②	41	16:37
とよの	10:15 ②	11	11:35
コスモス	15:15 ②	48	17:26
キアラ・コンパニーア	14:45 ②	40	16:09
河南混声	16:35 ③	50	17:40
男声合唱団 昂	16:50 ③	52	17:57
ちばりよー沖縄	14:15 ②	38	15:55

リハーサル内の①②は舞台裏の練習室 ③は外の練習室

※ コンクールは午前10時20分に開会です。時間の許す方は早く参加して他の合唱団の演奏を聴きあいましょう。

※男声合唱団「昂」はトリの演奏です。心を込めて精一杯の演奏をして、推薦を勝ち取りましょう。

(参考資料)

「夕焼け」(第12回コンサート：第1部曲) (投稿:伊藤)

信長貴富作曲の「夕焼け」は、当時女声11名の合唱グループ「クール・ブリアーン」が、信長に委嘱して作られた「女声合唱とピアノのための『空の名前』」という5曲で構成された作品の最終曲です。

曲目は、

1. 空の名前(高橋健司同名写真集より)
2. かなしみ(谷川俊太郎)
3. そら(池澤夏樹)
4. 天空歌(永瀬清子)
5. 夕焼け(高田敏子)

2002年11月4日にキリスト品川教会で「クール・ブリアーン」によって初演されたようです。

初演した同団のサイトに「5. 夕焼け」について次のような記述がありました。

「美しい、それはそれは美しい・・・けれども、胸が痛くなるような曲だった。

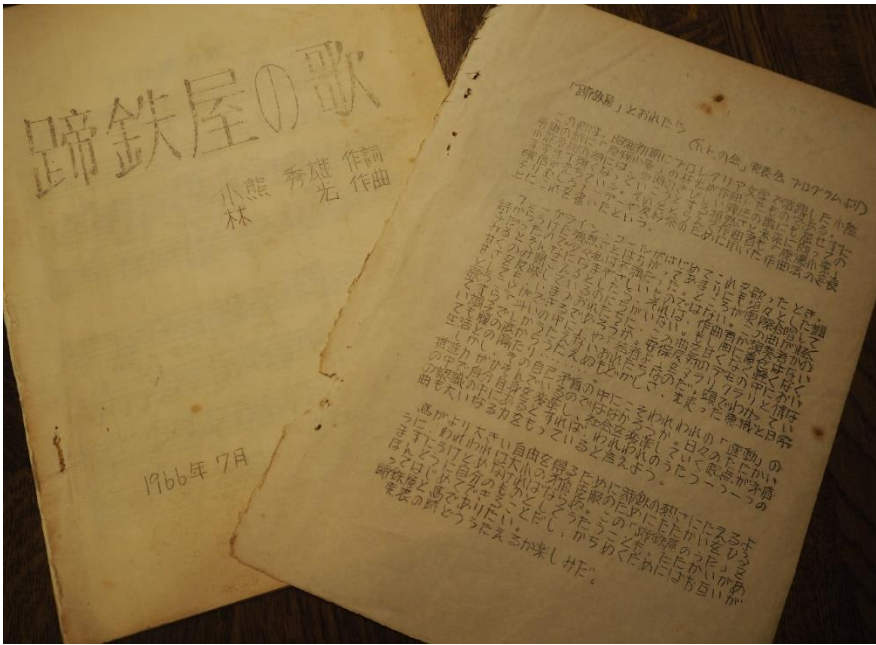
そのころ、世界では戦争があり、テロがあり、悲しいことが多すぎた。

この地球という星で、空はみんなのものであり、一日の長さはみんな同じであるけれど、どこかで必ず悲しいことが起きている。夕焼けを「美しい」と思えたら、すさんだ心を溶かしてくれるのかもしれないと、祈るような気持ちで歌った。」

後に、多くの合唱団で演奏されるようになり、混声合唱版、男声合唱版へと広がり出版。

昂12回コンの2019年2月22日は、初演から既に16年余が過ぎている。しかし、世界の状況は初演当初とそれほど変わらない状況にあるのではないか。

(参考資料)



「蹄鉄屋」とおれたち(「ハトの会」
発表会プログラムより)

この曲は、昭和初期にプロレタリア文学で活躍した小熊秀雄の詩に、「原爆小景」の林光が作曲したものである。小熊秀雄の詩には、当時の厳しい弾圧の嵐にも屈せず、益々強くなっていくとする根強さと未来に向かっての革新が充ちている。それをとらえて作曲者も「原爆小景」よりむしろメーデーや友好祭のために用いた作曲法の延長上にこれを書いたという。

フェーゲライン・コールが初めてこれを歌ったとき、詩からうけた強烈さ

とはちがってあまりにも坦々とした調子だったので少々私は不満だった。ところが実際合唱してみるとそんなに生易しいものではない。この曲が軽く、甘くのみ聞こえるとしたら、それは作曲者か演奏者かの甘さを反映しているのに違いない。

もし曲に責任はないとしても、今の俺たちに、この曲を甘くなく軽くなく歌うことができるであろうか。安保反対のデモの中においてすら「たたかいの中に」や「若者よ」をヌラリクラリと情けない調子でしか歌えない俺たちなのだ。頭でわかっているけれども腹の底から歌えぬもどかしさ、先走った意識と日常生活の隔たり……。

しかし、その自己矛盾の中にこそ我々の「運動」の推進力が潜んでいるのではなからうか。日々のたたかいの中で、自分自身を変革し、社会を変革していく起点が矛盾の認識の中にあるとすれば、我々の歌う一つ一つの曲も大いなる力を持っているといえよう。

馬がより大きい自由を得るために蹄鉄の熱さに耐えるように、我々は大小の矛盾克服のために、たたかひをひるまずに受け止めなければならぬ。この「蹄鉄屋の歌」を本当に自分のものとして歌うことも、たたかひがあつて初めてできることだし、勝ち抜くためには、お互いが蹄鉄屋と馬でありたい。発表の時、どう歌えるか楽しみだ。』

昂総会が終わり、新たな方針が出され、来年2月の第12回コンサートに全力を注ぐのは言うまでもありませんが、更に次のコンサートに向けての取り組みも進めることが決まりました。

13回コンサートの発表曲には、12回曲選定時に挙げられていたが外された曲がいくつもノミネートされています。その中の1曲に「蹄鉄屋の歌」があります。

先日、資料を整理していたら、学生時代に所属合唱団で歌った楽譜が出てきて、その最後のページに解説が付いていました。(楽譜印刷時点：1966年7月)

現在、「芸能山城組」として有名になっている集団の前身である「ハトの会」が演奏した時のプログラムに記された主張を引用したものです。 曲解釈の参考になればと、お送りしました。

2018年8月末

山本宏司